新春対談

「国」の概念ゆらぐ時代

斎藤　本日はよろしくお願いいたします。

安倍首相は農政大転換を行おうとしていますが、先行きが全く見えないというのが現場の声です。今日は現場に元気が出るようなお話をお聞きしたいと思っております。

グローバリゼーションは行き詰まり、農村ばかりか都市部でも展望が見えない時代です。最初に時代認識についてお願いします。

蔦谷　よろしくお願いします。

90年代から資本主義が金融資本主義に変わり、マネー優先の社会に切り替わってきた。その矛盾がリーマンショックで出てしまいましたが、これは資本主義の限界が露呈したものと思っています。金融資本主義の次の段階が求められており、資本主義自体が問題なのかもしれない。抜本的に見直さなければいけない重要な時期だったにもかかわらず、高度経済成長期をもう一回取り戻そうというのがアベノミクスであり、TPPを始めとした貿易の自由化だと考えています。

これまでは1国経済中心の資本主義でしたから、資本主義が発展をすれば利益は国内に再分配されて還元される構図でした。今は企業が多国籍企業化し、国と企業の関係が抜本的に変わってしまった。グローバル化一辺倒、多国籍企業中心の経済でどこまで成り立っていけるのか。国という概念が揺らいでいる時代だと思います。

国とは何かを議論しなければいけないのに、そういう議論を抹殺しようとしている。彼らが良い意味の保守主義に回帰するなら評価の仕方もあるでしょうが、言っていることとやっていることが違い過ぎます。そして、公約を守らない。議会制民主主義自体が本当に揺らいでいます。

大規模化志向の功罪

斎藤　自民党農政は日本の農業を縮小し続けました。世界の食糧事情が窮迫しているなかで、農政の問題点をもう一度総括をする必要があると思います。

蔦谷　自民党の基本は経済立国で、農業を自ずと軽視するという基本的な考え方があった。本質的には日米同盟優先です。アメリカの傘の中で高度成長を遂げ、見返りとして自由化を進めた。特に煽りを食ってきたのが農業だと思います。貿易自由化で、特に穀物は基本的にアメリカから入って来る。どんどんと縮小を余儀なくされ、さらに、WTO体制やTPPでトドメを刺そうとしているのではないか、と理解をしているんですが。

斎藤　「攻めの農政」と格好いいことを言っていますが、狙いは、日本農業の特質をすべて消し、大規模化、土地利用型の大型化にある気がしています。

元々は家族農業のアメリカも大規模農家が大勢で、農地平均が200㌶以上ですから国際的にも大規模化のメリットがありますが、日本は違います。ある意味、大規模化は墓穴を掘ることで、規模を追求するほどアメリカの餌食になって、格差は埋められない。TPPで1番影響を受けるのは大規模農業です。

蔦谷　彼らは本気で日本の農政の問題を考えていないと思います。経済学者や財界が言う競争原理を入れればうまくいくと。農業はベースに自然・環境、地域のコミュニティがあって成り立つと思います。アベノミクスは産業としての農業で、地域コミュニティは関係無い。言葉では環境、自然と言いますが。

日本型農業にこそ優位に

斎藤　活路は適地適作、多品目少量生産という対応力ではないでしょうか？都市との距離の近さも有利かと。

蔦谷　日本農業の最大の特徴が地域性の豊富さです。日本は狭いがゆえに地域性があり、その地域性が活かされる農業というのが大事なポイントです。また、日本農業では生産者のレベルが非常に高い。職人気質で、地域の特性を活かして少しでも良い物を作る。そこをどれだけ活かしていけるのか。

日本の消費者は世界でも高い水準を持っています。味覚にも安全にも非常に厳しい。加えて、都市と農村の距離が非常に近く、限界集落とされる所でも、半日あれば行けますから、都市と農村の交流が非常にしやすい。

そして日本の風景です。里山の風景、生物の多様性などの特性を活かすこと。地域を愛すると同時に地域に合った作物を作れば、おのずと他とは違った物ができます。差別化しながら連携し、競い合いながらレベルを上げてきた日本農業が活力を戻すとすれば、今一度地域に返ることが最も大事ではないか。

TPPなりWTOの世界は、グローバルに対応できる分業した農業や、大規模化で対抗すれば絶対に負ける。グローバルな世界には、ローカルで対抗するのが一番大事です。生産者が地域の特性を活かした農業をすると同時に、生産者と交流をしながら消費者に日本農業の価値を再認識してもらう。ここが大きい課題と思います。

人・農地プランの発想は間違ってはいないと思いますが、マッチングだけで農業はできません。誰がどこの農地で何を作るのか。そして、誰がどうやって売るかです。形だけのプランでは補助金の対象というレベルで留まってしまう。地域の当事者が仕組みを活かして、むしろ行政に現場の事情を訴えて要求を出し、現場に合った政策を引き出すという努力が求められるのではないでしょうか。

斎藤　流通も大切ですね。基本は地産地消だと。直売所や道の駅なども、まだ大きな流れにはなってませんね。

蔦谷　グローバル化すればするほど市場流通は輸入物に席巻されます。規格品の大量流通、広域流通が市場流通の役割です。

今、地域の食文化の情報が地域で評価をされて全国に広まるという大きな流れが出ています。地産地消で終わりではなく、次は、市場流通で若干差別化して売られる、宅配などを使い広域流通で売っていくという流れに確実に変わってきていると思うんですね。

斎藤　それから農業に対する消費者の理解が必要ですね。アンケートでは多くが自給が良いと答えますが、いざとなると安い方に行ってしまう。貿易自由化が進行するほど、農家や農業に対する国民の理解が非常に大事です。そして、農民からの情報発信も、さらに必要になってくると思います。

戦後体制の激変を思わせる２０１４年を迎えた。吹き荒れる経済至上主義は、大切に受け継がれてきた緑の風土までも大企業の思うままに変えてしまおうとする。真に守るべきは何か。次世代に手渡すべきは何か。年頭にあたり今一度確認するため、日本農業の特質を発信する、農の尊さ

意見広告

北海道農民連盟
委員長　山田富士雄
副委員長　川崎伸一
〃　石川純雄
書記長　山居忠彰

全日本開拓者連盟
委員長　西谷悟郎

全国出稼組合連合会
会長　細谷昭雄
事務局長　増田浩司

社会民主党・秋田県議団

女性会議
女のしんぶん
文京区本郷二―二七―二東貫ビル５Ｆ
(3816)1862代

下越高圧線下農民組合連合協議会
新潟県五泉市旭町六―四五
電話　〇二五〇―四二―四〇〇〇

五泉地区高圧線下農民組合
新潟県五泉市旭町六―四五
電話　〇二五〇―四二―四〇〇〇

蔦谷　その通りです。消費者とのコミュニケーション能力を持っているかどうかです。農業体験や都市と農村の交流を通じて消費者の理解を獲得していくことが大切ですね。そして、ITの情報発信力です。消費者も切実に求めています。今ではアトピーでない子どもの方が少ないくらいですし。安ければ良いという人たちと、生産者と一緒に何とかしていこうという人たちに二極化してきていると思いますね。

私は、貿易の自由化が進み、自給率が30％や20％となったら、消費者の20％をどう掴んでいくかを考えた方が良いと思う。それが、日本の消費者全体に及んでいくことになるのではないでしょうか。

規模の大中小があってこそ

斎藤　直接支払いについてはどのように？

蔦谷　菅さんが言ったTPPで大規模化思考と見られるところもありましたが、民主党農政はほとんど新しい農政を打ち出せず、逆に言えば現場に任されたのが実態でした。みんなが直接支払いや中山間地域対策費用をもらいながら、利用権の移行を進めて、結果として規模拡大が進んできたという流れです。大規模農家は条件の悪い所も含めて地域を守るために集積をする。その人たちの経営を維持していくために、優先して補填をしていくというのが基本的な論理だったのではないか。

ほとんどの大規模農家は畦畔の管理や水路の管理、雑草刈り取りなどは地域の中小農家に担ってもらいながら一緒になってやっていく部分と、自分たちが効率よくやる部分に住み分けをして、地域の農業を守ってきた。大規模化した人たちが自由化で潰れたら、あとをやる人がいません。

儲からなくても集積をして地域の農業を守ってきた結果として大規模になった人たちが維持できる水準で、どこまで補填を出せるかが大きいポイントになってくると思います。

自民党農政は永田町なり霞ヶ関の目線でしかない。これからの地域農業は、行政を使えるところは有効に活用しながら、これは駄目となったら補助金は要らないというくらいにしないと、自分たちの首を絞めることになる。信念を持ち自分たちのやり方をやることではないでしょうか。

グローバル化すればするほど世界の食料の輸出国はアメリカ、ブラジル、オーストラリアに集中して、少しの異常気象で値段がガッと上がるという振れがますます大きくなると思います。今のようなグローバル一辺倒の農業政策はいつまでも続くと思えないです。

政策的な支援については、全販売農家を対象にすることは悲観的に考えています。ある程度担い手を絞り込んで支援を集中していくことを否定はしませんが、誰にお金を集中させたら地域農業が守れるのかは、事情の分かっている地域にベース部分を任せ、権限を戻していくというのが求めたい方向です。

日本型直接支払いはあれでいいと思いますが、広く薄くになり過ぎるのではないか。日本型直接支払いに加えて、中山間地域が生き残れるだけのものをきっちりキープして欲しいと思います。

都市農業の役割重要

斎藤　都市農業が将来の日本の農業の大きな流れになるのではと書いておられますね。

蔦谷　いまさら都市農地を宅地や工場用地にする必要は無いのではないかというのが基本的な発想です。都市農業のポイントは消費者が見て買っていくというところです。農作業体験学習を学校と一緒にやることで、できるだけ農薬・化学肥料は使わない循環型の農業をやって行く。これはこれからの社会のキーワードだと思います。

里山資本主義も含め、もう少し広域でエネルギーも含めた都市と農村で作る広い循環で自給をしていく。都市と農村が入り混じった社会が求められていくと期待しています。

近代的畜産は限界に

斎藤　畜産はどうでしょう？アメリカから買ったトウモロコシを与えるというあり方も、問題が出ていると思います。25年ほど前にデンマークに行って、初めて動物福祉という言葉を聞き驚きました。そんな考え方があるのかと。バイオマスで熱と電気を取っていたことにも感心しました。

蔦谷　近代的な畜産は限界に来ていますね。BSEとか鳥インフルエンザが出て、家畜福祉という考えが出ています。2012年からでしたか、ヨーロッパでは鶏のケージ飼いが禁止されたそうです。有機農業も、家畜福祉もそうですが、アメリカの大規模生産と対抗していくためのヨーロッパの戦略でもあるんですね。作った基準のハードルをできるだけ上げていくことで、時代の流れに合った自然、環境、安全といったキーワードを選択する。EUはしたたかです。ヨーロッパから見ればアメリカは新参者。自分たちが歴史文化の正当という誇りを持ってると思いますね。僕は日本の農家がそこを再認識すべきだと思います。

日本の人口も、今世紀末には6千万人台になると思われますね。4割弱の米の生産調整をやって、5年先には減反廃止と言いますが、結局、農地を主食米以外で使っていかなければいけない。取りあえず飼料用米なり飼料用稲の増産で輸入穀物の代替としていくということだと思います。家畜を通すことでより大面積を活用でき、農地を農地として維持できるというものですね。450万トンの潜在能力を言われますが、そのためには今の8万円の助成金をどこまで付けられるかが大変大きい。

飼料用米・飼料用稲は、基本的には近代畜産の枠内でしかありません。家畜福祉ならむしろ放牧でしょう。放牧は一番農地面積を使うんですよ。元々日本は1㌶前後で家族経営ができていました。ヨーロッパは20～30㌶規模。畜産文化圏ではそれだけ必要でしたが、米文化圏は1㌶で何とか家族が食っていけた。それくらい生産性に差があります。

本格的な畜産を考えなければいけない時代になっていると思う。水田放牧と、草地もかなり荒廃している場所で大々的に放牧をする時代になってきたのではないでしょうか。日本全体がそういう流れにならないと、今の農地の維持管理はできません。農家の側も放牧畜産を大幅に取り入れながら、耕畜連携をもう一度かみしめながら、地域営農を組み立てていくことも必要ではないかと思います。

（4面につづく）

蔦谷栄一（つたやえいいち）　1948年宮城県生まれ。東北大学経済学部卒。元㈳農林中金総合研究所基礎研究部長、現在は同研究所客員研究員。農的社会デザイン研究所代表。週末は、山梨市牧丘町で自然農法を実践中。著書に、『日本農業のグランドデザイン』（農山漁村文化協会）、『都市農業を守る』（家の光協会）、『食と農と環境をつなぐ』（全国農業会議所）など。

意見広告

天知る、地知

新潟県五泉市
川東地区高圧線下農民組合
組合長　石田和夫

新津高圧線下農民組合
組合長　井浦政雄
役員一同

日農南部連合会
委員長　小倉和夫
副委員長　山田光吉
書記長　町田俊夫
書記次長　長谷川秀行
〃　熊倉政一

（財）下越農民会館
理事長　五十嵐基

日農新潟県連合会
執行委員長　中條敏巳

鳥取県酪農民連合会
会長　鎌谷一也

岩手県農民団体連合会
会長　関田良一

青森県農民組合連合会
会長　和田栄悦

全日農鳥取県連合会
会長　鎌谷一也

山林活用で畜産にも活路

斎藤　そして、山林の活用ですね。かつての里山はエネルギーの宝庫でした。東北では、かつては国有林を開放して草地にしたところが相当あります。今は荒れているんですよ。放牧する牛が少なくなっている。そこに中央から来た業者が風車を立てたり、太陽光発電の敷地にしたいので貸せとか。日本にとって非常に大事な山林の活用が、誠に不十分だと感じられます。

蔦谷　全くそうです。樹木の乏しいデンマーク・コペンハーゲンの空港で、床が木だったことに驚いた記憶があります。日本は木があるのに使われていない。価格の問題が大きかったと思いますが、今のネックは消防法ではないでしょうか。高層建築などにも木材は使えないのですか、技術的にかなり進んでるんですよね。もっと建築材として活用できないかと考えてます。

そして林間放牧、これを何とかしたい。北海道の様似（さまに）町で300羽の周年放牧の成功例がありましたが、今は尻すぼみになっています。最大のネックが食肉の基準なんです。輸入が増える中で和牛で差別化しようと基準が厳しくなった。アンガスと和牛を掛け合わせてやっていたんですが、雑種としか表示できなくなってしまった。通達が出る前は大変評判が良く、高い値段で売れていたものが、出た途端に買い手がいなくなってどんどんと規模縮小していき、いまでは最低レベルでやっている状況です。林間放牧は可能性があると思いますが、もっと総合的な仕組みが必要です。赤身の肉が美味いと消費者も判ってサポートして欲しいと思いますね。

広葉樹に変えていくということもあります。広葉樹はどんどん伸びますから、10年15年で伐ります。明るい所に草が生えますね。林間放牧には広葉樹がいいと思います。

自然観を取り戻す社会を

斎藤　最後に、安倍首相の経済路線ではなく、農業を中心とした日本のあり方を。

蔦谷　日本人は豊かな自然の中で、米の飯を食べてきたという遺伝子をしっかり持ってると思うんです。工業的な社会ではなく、私は農的社会と言っていますが、不合理な世界を飲み込みながら自然を恐れるという自然観をもう一回取り戻す。日本ならではという社会を作っていく潜在能力は、ものすごくあると思うんです。

問われているのは価値観だと思います。あまりにも進みすぎた工業的社会を、農業的な要素も含めながら、再度農的な社会をデザインしていく時代が来ているのではないか。

大事なターニングポイントです。ここで転換できなければ日本の将来はかなり悲観的でしょう。ある程度元気なうちにできれば、新しい世界でも日本型の貢献ができるのではないかと思っています。

斎藤　長時間にわたり、示唆に富んだお話をありがとうございました。

意見広告　**天知る、地知る、農の尊さ**　意見広告

参議院議員（比例区）社会民主党党首　吉田忠智
参議院議員（比例区）社会民主党副党首　福島みずほ
衆議院議員　社会民主党政策審議会長　吉川元
全日農名誉会長　谷本巍
全日農会長　青森県農民組合書記長　斎藤孝一
全日農副会長　鎌谷一也
全日農副会長　元衆議院議員　菊地董
全日農福島県連合会会長　全日農財務委員長　木村六朗
全日農顧問　目黒吉之助
日農新潟県連上越協議会　委員長　磯谷裕一　役員一同

全日農中央常任委員　佐藤健治
全日農中央常任委員　山形県農民連盟会長　清野力二
全日農中央常任委員　京都府総連合会会長　渡邊泰隆
全日農中央常任委員　京都府総連合会副会長　本田克巳
全日農会計監査　小川右善
全日農会計監査　全日農新潟県連執行委員　五泉市議会議員　町田俊夫
全日農特別中央常任委員　日農小国支部長　片岡力夫
十和田市議会議員　杉山道夫
十和田市議会議員　今泉勝博
ゆうき青森　農業者政治連盟

前青森県議会議員　元参議院議員　前民主党青森県農林・畜・水産委員長　三上隆雄
青森県東北町議会議長　沼田徳右衛門
社会民主党十和田支部　支部長　石井照三
七戸町会議員　昕清悦
花巻市議会農業政策推進議員連盟　会長　阿部一男
花巻　森林と暮らしを考える会　会長　関田良一
元山形市議会議員　枝松昭雄
元山形市議会議員　佐藤稔
食とみどり、水を守る山形県労農市民会議

福島県会津若松市　河東町農民組合　組合長　板橋庄司
全会津農民組合協議会　代表　堺百人
農業に元気を！　生産者消費者ネットワークにいっ　坂爪正美
祝　新春　上州農民　農地を守って八十年　高橋保
農業　群馬県藤岡市　高橋ファーム　高橋聡哉
喜柑坊の会　清家久万夫
熊本県農業者連絡会　会長　渡辺保徳
元立教大学教授　元全中営農部長　石原健二
フォーラム平和・人権・環境（平和フォーラム）　食・みどり・水委員会

新潟県南魚沼JR高圧線下補償農民組合　組合長　中條敏巳　副組合長　鈴木荘平　〃　上村守　書記長　牛木芳雄　会計　若井壮一郎
早出川土地改良区　理事長　松澤聡
新潟県六日町高圧線下農民組合　組合長　山田益男　副組合長　戸田信義　〃　角田賢一郎　〃　小林竹文　書記長　桑原正信　会計　高村茂夫
有限会社　セーフティ・アンド・フレッシュ　全日農京都府総連合会　TEL 0774(63)5555　FAX 0774(62)0669